

北海道立市民活動促進センターは、営利を目的としない、地域の様々な課題を自ら解決しようとする道内の市民活動を応援しています。

## 特集

## 道内で活躍する市民活動を紹介します

平成 25 年度の当センター事業で、道内で活躍している市民活動団体の活動を集録した「活きいきまちづくり～北海道の市民活動レポート 2013」(当センターホームページで閲覧できます)を作成しました。その一部を抜粋して順次ご紹介しています。

今回は「NPO法人シャペロン(江別市)」「NPO法人カムイ大雪バリアフリー研究所(旭川市)」「喪の悲しみを癒す会(函館市)」の 3 団体の活動をご紹介します。

### NPO法人シャペロン(江別市)

#### ～ 高齢・障がい者の手足となって行動する ～

年をとっても病の身でも、心身に障がいがある人でも人生を楽しみ、充実して過ごしたいとの願望は生涯続く。

この切実な思いをかなえてあげたいと作られたのが、江別市幸町に事務所を持つNPO法人「シャペロン」だ。理事長の小野寺さゆみさん(42)自身も難病患者のほか、スタッフの大半が社会福祉士、介護サービス専門員などの有資格者。

#### ■ 難病で高齢・障がい者の苦衷を知る

「シャペロン」とはフランス語で、社交界デビュー前の娘に付き添う女性の名称。一緒に寄り添うことで不安を和らげ、希望を持って生きてゆけるよう手助けしたい、の願いをこめてつけられた。



お客からの同行依頼で、マイカーでさっそうと出かける小野寺理事長。その顔は生きがいに輝いている

小野寺さんは水道・土木関係の会社に就職。家やトイレ改造の技術をマスター、同時に高齢者・障がい者の住宅全般について専門的なアドバイスができるまで

となった。ここで小野寺さんは一念発起、札幌学院大の人文学部臨床心理学科に編入し、社会福祉士、ホームヘルパー1級の技術と資格を取り、会社員と介護士の掛け持ち人生を描いたが好事魔多し。病魔が忍び寄り、気がついた時には思わぬ難病に取り付かれていた。

#### ■ 介護サービス事業所の実態調査にまい進

一時は我が身の不幸を思ったが、頭を切り替えた。「いずれ日常生活が不自由になるかもしれない。だからまだ元気なうちにやりたいことをやり、行きたいところへ行ってみたい」同時に「私と同じ思いを持ちながら出来ないでいる高齢者や障がい者も沢山いるに違いない。そんな人たちの力になってあげられればいいな」こう納得すると、取締役までになっていた会社を退職。同大学の地域社会マネジメント研究科に入り直し、介護情報公表・福祉サービス第三者評価調査員、次いでその指導員の資格を取得。その頃江別に設立されたこの調査機関の役員となって調査活動に乗り出した。

この仕事を通じてわかったことは、介護サービスの中味が事業所や地域によって大きな差があること。介護保険を正しく知らなくてはと考へ、今度は同大学院法学研究科に入学。現在も同科に在籍して介護制度の研究をする傍ら、全道の介護サービス事業所の実態調査に飛び回る毎日。

## NPO法人シャペロン（江別市）

## ■ 研究仲間とシャペロン立ち上げ

この段階で解決し切れない難問にぶち当たった。高齢者や障がい者への真の支援が、現制度や事業所のシステムでは、生きるための最低限の支援に限られていて、楽しみや生きがいといった人間らしい暮らしには対応し切れないということだ。

それを実現させてあげるにはどうしたらいいか。出てきた結論は願いを叶えてあげる組織を作ること。その足で内閣府のソーシャルビジネス起業支援制度を利用して誕生させたのが、「シャペロン」だ。2012年（平成24年）2月のこと。会員には趣旨に賛同した学友や介護士、福祉士らをはじめ教育、観光、環境などの専門家が加わり総勢約40人。ほかにテーマに応じて同行し、アドバイスしてくれる協力者も多い。利用は有料とし、外出同行は1時間5千円、移動の際の交通費や入場料等は依頼者側の負担。

## ■ 滑り出し順調。増える同行依頼

引き受けた仕事は団体や個人合わせてかなりの件数。道庁の「次世代担い手育成推進事業」の一環として幕別高校で行われた視覚障がい者体験授業では、高校生に目の不自由な人の日常がいかに大変かを体験で学んでもらった。

この道庁の事業に対するサポートは2013年夏、札幌・白石小学校でも行われた。車いすや目、足の不自由な人がどんな思いで生きているのかをわかり易く話したあと、実際にその大変さを体験しても



札幌・白石小児童を前に障がい者の大変さを講話する小野寺理事長

らった。子どもたちはみんな車いすや目が見えない辛さを実感し、「まちに出てそんな人に出会ったらぜひ手を貸してあげたい」と誓っていた。

個人の依頼は、「お墓参りに行きたいので一緒に行ってもらえないか」、「ホテルを見に行きたい。何とかその場所を見つけて連れて行ってほしい」、「車い

すで登山したいがかなえてもらえないか」など種々雑多。

シャペロンが仕掛人となって行った高齢者の外出支援もある。札幌の公益財団法人「はまなす財団」と共催で、札幌市内の高齢



「はい、承知しました」シャペロン事務所で高齢者らからの注文を受ける小野寺理事長

者向けマンションの入居者に、市内中心部の百貨店で買い物を楽しんでもらおうという社会実験。

2013年夏、高齢者20人が参加、札幌丸井三越で4時間あまりの買い物を楽しんだ。参加した高齢女性（85）は「自分のお金と足で好きな物を買える、こんなに楽しいことなんだと久しぶりに感じました。また来たいです」と満面の笑顔。

「シャペロン」の対応は全道一円と広範囲。サービスの内容も保健、医療、福祉、観光、環境、人権、スポーツ、遊び、子供の健全育成等々幅広い。

小野寺理事長は「この仕事は山に登ることに似ています。頂上に登る（やりとげる）までは色々大変なことが多いですが、やりとげて感謝された時の達成感がすばらしい。またやってあげようというエネルギーが湧いてくるんです」ときっぱり。これからの目標について「高齢者のサービス付き住宅が増えています。私たちとしては、どんな住宅が好ましいか、住んでいる人の真の幸せを実現するにはどうしたらいいかを研究し、提案してゆきたい」と語っている。その表情は病身にもかかわらず、生きがいへの喜びと誇りに輝いていた。

## ■ 連絡先

〒069-0812 江別市幸町 31  
NPO 法人シャペロン  
理事長 小野寺 さゆみ  
TEL：011-558-2552  
Email：onodera@syaperon.org

## NPO 法人カムイ大雪バリアフリー研究所（旭川市）

### NPO法人カムイ大雪バリアフリー研究所 （旭川市）

#### ～ 高齢・障がい者の目、耳、口となる ～

高齢者や障がい者に対する社会の理解や支援は時代とともに徐々に充実してきているが、十分とは言えない。なかでも最も求められながら非常に不足しているのが、外に出て人生をエンジョイしようとする際の情報。

こうした人たちの目や耳、時には口、足になって求めているものを探し、安心して出かけられるよう情報を提供するのがNPO法人「カムイ大雪バリアフリー研究所」だ。スタッフの大半も、車いす使用



ここは障がい者にとって安全、安心な所か—当事者目線で安全の確認をするチーム紅蓮のスタッフ

など何らかの障がいを持つ人たちなので、きめ細かな対応ができ、同じ手助けをする団体が全国ネットでつながっているため広範囲の応対も可能である。

#### ■ 障がい者スポーツの合宿対応がきっかけ

2005年（平成17年）冬、旭川で、冬のパラリンピック（身障者のオリンピック）のアイススレッジホッケー（下半身に障がいがある人が、底にスケートのついた特殊なソリに乗ってパックを相手ゴールに入れることを競う氷上競技）の日本代表選手の強化合宿が行われたのがはじまり。当時旭川には、障がい者を団体で受け入れるノウハウもなく、デザイン設計会社を経営していた関係で、障がい者の知り合いが多かった現研究所会長・理事の只石幸夫さん（60）たちが中心になって対応した。多くの障がい者アスリートの受け入れは初体験。それでも選手のために、また旭川のメンツにかけても満足のいく合宿をさせてあげたいと実現にこぎつけた。だが実際に始めてみると、気付かない不具合が次々出てきた。苦慮していた時に知り合ったのが、車いすの障

がい者、現研究所バリアフリースターセンター長・五十嵐真幸さん（27）。

五十嵐さんは地元出身で当事者目線で接することができる強みを持っている。只石さんたちの苦衷を察すると直ちに協力を申し出た。

五十嵐さんの仕事は車いす2台・2人と介護者1人の計3人が一組で行うのが常態。只石さんたちはこの協力者に「車いす<sup>ぐれんたい</sup>紅蓮隊」と名付け、障がい当事者でなければできない仕事をまかせた。この甲斐あって合宿は大成功。その冬開かれたトリノパラリンピックでの活躍に結実し選手や関係者一同から「お陰様で。ありがとう」の感謝の声寄せられた。

#### ■ 経験を積み重ねNPOを立ち上げ

合宿を進める課程で何が不足で、何が必要か、どうすれば温かいおもてなしが出来るかなどは十分に学んだ。福祉関係の団体や旭川医大、旅行、ホテル、飲食店、障がい者スポーツ団体などとのつながりもできた。これらの情報を、障がい者らに提供して、大いに人生をエンジョイしてもらおう。こうして「カムイ大雪バリアフリースターセンター」の礎は、多くの協力団体を巻き込んで2010年（平成22年）誕生した。カムイはアイヌ語で「神」、大雪は旭川のシンボル、共に快適さを実現できるよう求め続けるという意味でつけた。

活動は最初から活発でスピーディー。国の障害者自立就労支援事業の指定を受け、ホテル、飲食店、公共施設などの受け入れ体制の調査研究やそのデータ蓄積をメインに、植樹や農業実習する水・美土里事業、デザイン・プリント事業、家具・調度、家屋の傷や汚れを修復・復元する事業、パソコン入力やホームページの制作、画像編集の実践とそれらの技術を講習するICT事業の5つを実施。ほかに無料のサービスとして高齢・障がい者に旅の情報をきめ細かく提供する事業や、障がい者でもできるニュースポーツの創造と参加への呼びかけ、ハンデを持つ人たちが安心、安全に観光を楽しめるためのバリアフリー観光の推進など、一人ひとりがバリアフリー観光関連事業の就労ノウハウ蓄積に向けて多角的に

## NPO 法人カムイ大雪バリアフリー研究所（旭川市）

取り組んでいる。これらの事業を実際に手がけ、提供の中核を担っているのが、障がい者スポーツ団体の旭川合宿を支えた五十嵐センター長をリーダーとする

「車いす紅蓮隊」。現在は同じ目的で地域内外のたくさんの仲間が集う「チーム・紅蓮」に進展している。



五十嵐さんら身障スタッフの手によってプリント制作されたTシャツ、トレーナーの数々。オーダーによってオリジナルの作品が次々に誕生。天井にはチーム紅蓮の旗も

### ■ やりたいことを次々に実現 目見張る行動力

研究所の直接スタッフは、只石会長をはじめ「チーム・紅蓮」を中心に車いすの人数人とその介護者、障がい者ら15人ほど。行う事業によって他の会員や協力団体に協力を求める。

驚くのはその行動力と行動の範囲の広さ。例えばある障がい者から〇〇ホテルに行き、△△レストランで食事をしたいのだが…という相談があったとする。すると、車いすのスタッフが車で現地に出向き障がい者目線で細かく調査。もしハードにバリアがあるなら、ソフト的な工夫で対応して受け入れてもらえるかなどを打ち合わせ、現地までの交通手段なども合わせて相談者へ回答する。対応範囲は今のところ旭川中心の上川管内が主だが、北海道全般についても情報を取り寄せて応えている。

また、ここの強みは全国16地区にあるバリアフリーツアーセンターとネットワークでつながっていることで、全国の主なところの受け入れ状況が入手できることだ。

一方、人生を楽しむイベントへのいざないや主催事業も極めて活発で、中でも力を入れているのが祭りへの参加。旭川最大の夏祭り「旭川さんろく祭り」には、研究所発足当初から車いすの集団で加わり、翌年には独自に露店も出すほど。2年後にはこの意気込みに感動した当時の観光協会会長から「みんなで神輿を担いでみませんか」と、保存してあった神輿一体の使用をまかされた。

そのままでは車いすで担ぐのは無理なので、揺れる特殊な台車をもつ神輿に改造。北海道内外からも車いすでの参加者が大勢集まり、今ではさんろく祭りの名物神輿に。神輿担ぎは沖縄から参加した障がい者の共感を呼び、これまで3回、南国の地で障がい者らを楽しませた。

五十嵐さんらは「車いすの人たちは祭りといえど“人の尻”ばかりしか見えなかった（目線が低いので祭り参加者の下半身しか見えなかった）が、これで我々もみんなと対等に楽しめるようになった」と笑い飛ばす。



セイヤ、サー、セイヤ、サー。車いすと一緒に神輿を担ぎ全身で祭りを楽しむ障がい者の人たち

このほかハンデを持っていた人たちは到底無理と思われていた楽しみを次々に実現させており、全道、全国の障がい者や福祉団体の注目を集めている。

五十嵐さんは「自分たちの役目は困りごとや望むことを聞いてバリアの取扱い方をアドバイスしてあげられること。だから、一緒に取り組み、願いが叶えられた時はとても嬉しい。もっとたくさんの人たちにもセンターを知ってもらい、相談が寄せられ解決されることを望んでいます」と意気軒昂。また会長の只石さんは「我々の実践や仲介で多くの高齢者や障がいのある人たちが人生をエンジョイし、ふれ合いの輪が広がればこの上もない喜び。今のところこうした組織は旭川しかないので、札幌はじめ、もっと全道的に広がり、より多くの人たちに社会参加の喜びを味わってもらえれば嬉しい」と語っている。

### ■ 連絡先

〒078-8368 旭川市東旭川町旭正 315-2  
NPO 法人カムイ大雪バリアフリー研究所  
代表 只石 幸夫  
センター長 五十嵐 真幸  
TEL/FAX : 0166-38-8200  
Email : kamuitad@sc-kamui.co.jp  
URL : <http://kamui-daisetsu.org/>

## 喪の悲しみを癒す会（函館市）

### 喪の悲しみを癒す会(函館市)

#### ～ 悲しみに寄り添い10年、遺族の心をケア ～

大切な人を失った悲しみは簡単に癒えるものではない。特にそれが、子供の自死の場合などはなおさらであろう。

その悲しみに、一人では立ち直れないこともある。そんな人のために、「喪の悲しみを癒す会」（中野恵美代表）が、2003年9月に設立され、同会スタッフが悩みを聞く相談会が始められた。それ以来、毎月第3日曜日には必ず会合が行われてきた。その間、同会代表の中野さんは一度も相談会を休んだことはない。

「欠席はできません。だから、できるだけ、病気にならないように自己管理にも気をつけています」と、微笑む。

「これまでに、のべ300人以上にカウンセリングを行ってきました。泣いてばかりいた女性が、少しずつ立ち直って、笑顔も見せるようになってくるのです。それをじっと見守っています」中野さんは、遠くを見るかのように目を細めた。



相談者の話にじっと耳を傾けるスタッフの皆さん

#### ■ 長女を失った悲しみを乗り越え

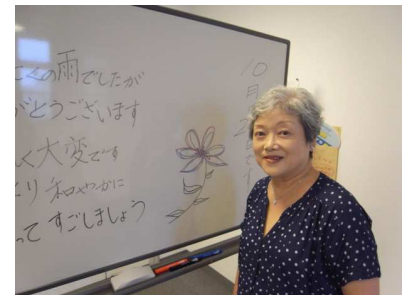
中野さんが、癒す会を設立しようと思いついたのは、長女が亡くなったことがきっかけ。

「娘は、ダウン症で口腔に障害があったため、言葉を持ってない子供だったのです。でも、表情が豊かで優しい子供でした。だからこそ、しっかりとした教育を受けさせたいと、私自身も頑張ったのです」そう振り返る。そんな長女だったが、36歳で亡くなった。そのときの中野さんのショックは大きかったという。「心身にその症状が現れたのです。味覚や聴覚などに障害が出て、何を食べても味がなくなって、

外に行っても風を感じない。周りが立体的ではなく、平面に見えてきたのです」その時は、混乱したが、「ああ、これは、認知障害が起こっている」中野さんは、すぐにそう自分自身を冷静に分析できたという。

以前から市民活動などに関心を持っていた中野さんは、「函館家庭生活カウンセラークラブ」が実施しているカウンセリング研修講座に通い、同講座2級の資格、さらに勉強を重ねて他校の心理カウンセラーの資格も取得していた。だからこそ、冷静に判断できて悲しみを整理することができたという。

このとき、自分と同じような悲しみを抱えている人々を救いたい、悲しみを癒すための活動をしたいと、決意した。



悲しみを話すことで癒されますと代表の中野恵美さん

#### ■ まずは、メンバー集めから

カウンセリング講座に通っていた仲間に声をかけて、賛同を得た。さらには、手書きのチラシを作成して、それをコピーして配ったという。

こうした努力が実って、第1回目の会合には中野さんを含めてスタッフ3人と、参加者3人の合計6人が集まった。2003年1月に長女が亡くなって、同年3月に会の結成を決意、同年9月に第1回目の会合を行ったことになる。

「カウンセリングの時間は、午後2時から4時までとなっていますから、その時間内に相談者は来てもらえればいいのです。スタッフには守秘義務があり、相談者の話を他に漏らすことはありません」さらに、相談に訪れる人の本名や住所なども聞かないという。

会費は1人1回200円のみ。お茶や菓子なども振る舞われる。毎月第3日曜日の午後2時から、函館市地域交流まちづくりセンターで行われており、

## 喪の悲しみを癒す会（函館市）

ボランティアスタッフ6人（2013年9月現在）で相談にあっている。相談者は毎回5～6人、多いときで7～8人参加する。

同まちづくりセンターの減免対象団体に認定されているため、会議室の使用料金はかからないという。

### ■ ひたすら聞くことが大事

「初めての相談者には、ずっと耳を傾けます。まず話を聞くことです。ときには1時間以上、ひたすら聞き続けることもあります」

話ながらメモを取らない。相手が不安になるからだという。悩みの内容についても、本人が話し出すまで、聞き出さない。その場限りだからこそ、相談者も心を開いて打ち明けられると話す。

「相談者は、心の内をさらけ出しているうちに、少しずつ自分自身を分析するようになるのです。泣きながら話をする人もいますが、泣くことはとても重要なことなのです。話しているうちに、私の胸に飛び込んできた女性もいました。私たちはただじっと待つのです」

スタッフもまた、同様の悲しみを抱えている人が多いという。

スタッフの一人である落合京子さんは、事業家としての肩書きも持つ。

「月1回だから、それほど負担にならなく出来たのかもしれませんがね。それでも、私はどうしても来られないときなどありましたが、とにかく、相談者の話に耳を傾けること。相手が傷つくようなことは言わないことが大事だと思います」

スタッフの見上ツエ子さんも、「そうですよ。心を傾けて、相手のことを聞かなければ」と頷く。スタッフを始めた動機については、カウンセリング研修講座に参加していたときに、中野さんから誘われたという。

「何か社会に役に立つことをやりたいと思っていましたし、それが人の役に立つならと始めました。それに、カウンセリングを勉強したことで、自分自身でも、自分の気持ちを客観的に見られるようになって、家庭でもストレスが溜まらなくなったのですよ」

明るい表情で、見上さんは語っていた。



相談を受けるスタッフのメンバー

会場を提供している函館市地域交流まちづくりセンターの丸藤競所長は、彼女たちの印象を語る。

「癒す会は、派手さはないが、地道に活動を続け、着実に成果をあげているといった印象を受けます。

毎年センターでNPO祭りが行われますが、最初のころはスタッフの人たち自身も、悲しそうな感じでしたが、最近では積極的に活動をなされています」



会場となっている函館市地域交流まちづくりセンター（末広町）

### ■ 悲しみは、語ることで癒される

121回目の相談会が終わった後、激しさを増す外の雨を見つめながら、中野さんは強く語ってくれた。

「世代間の断絶、核家族の現代だからこそ、孤立化している人が多くなっています。だからこそ心のケアを担う組織が必要不可欠なはずです」

そして、優しく呼びかける。

「悲しみは人に語ることによって、癒される場合もあります。一人で悩まないで、ぜひとも多くの人に参加して欲しいです」と。

### ■ 連絡先

〒041-0806 函館市美原2丁目41-3  
喪の悲しみを癒す会  
代表 中野 恵美  
TEL/FAX：0138-46-2777

# インフォメーション

## ◆道立市民活動促進センター事業のお知らせ◆

### ●NPO 法人設立基礎講座●

「市民活動の基礎からNPO法人設立までを一緒に学びませんか」受講者募集中！

コミュニティづくりやボランティア活動、NPOなどの市民活動に関心のある方やNPO法人設立を考えているなどを対象に「NPO法人設立基礎講座」を開催します。

本講座は、市民活動の基本的な知識からNPO法人設立に必要な手続きや申請書類等について学びます。

#### ■日 時

平成26年12月13日(土) 14:00~17:00

平成27年 2月26日(木) 18:00~21:00

◎各日程同一内容です。ご都合の合う日程でお申し込み下さい。

■場 所:「かでる2・7」 1040会議室  
(札幌市中央区北2条西7丁目)

#### ■内 容: 講義

「NPOの基礎知識とNPO法人設立に必要な要件や申請手のポイント」

講師 東田 秀美さん

(NPO法人旧小熊邸倶楽部理事長)

■参加料: 300円

■定 員: 各30名(先着順とします)

■対象者: 市民活動に関心のある方  
市民活動実践者  
NPO法人設立を考えている方

■主 催: 道立市民活動促進センター

当センターでは、市民活動に関する  
疑問・質問に相談員がお答えしています。

「NPOって何ですか?」「ボランティア募集の情報を知りたい」「助成金に関する情報を得るにはどうしたらいいの?」「市民活動団体の運営についてアドバイスを受けたい」「現在の活動団体をNPO法人化したい」など、市民活動に関わる相談にお答えします。

来館または電話、FAX、メールなどで、お気軽にご相談下さい。

- ・TEL: 011-261-4440
- ・FAX: 011-251-6789
- ・E-mail: center@do-shiminkatsudo.jp

### ホームページで情報発信中の 「北海道市民活動団体情報提供システム」

このシステムは、道内のNPO法人と市民活動団体の情報を提供しています。

当センターのホームページトップ画面の画像下の「北海道市民活動団体情報提供システム」をクリックしてください。

<http://www.do-shiminkatsudo.jp/>



#### 【検索機能】

- ・団体名、活動分野、地域、キーワードによる市民活動団体の情報検索が可能です。
- ・NPO法人の定款、事業報告書、財産目録、貸借対照表、活動計算書/収支計算書の閲覧が可能です。
- ・各団体のイベント情報、ボランティア募集情報の閲覧が可能です。

#### 【登録すると】

- ・団体の活動のPRやイベント、ボランティア募集等の情報発信が可能です。
- ・どこからでもログインして情報(イベント・ボランティア募集情報等)の入力・編集が可能です。

●是非、ご活用ください。

## ◆ 助成金情報 ◆

## ●公益財団法人損保ジャパン記念財団●

## 2014年度社会福祉事業

## ①「認定NPO法人取得資金」助成

地域の中核となり、持続的に活動する質の高いNPO法人づくりを支援します。

## ■助成対象団体

社会福祉分野で活動し、認定NPO法人の取得を計画している特定非営利活動法人

## ■助成内容

「認定NPO法人」の取得に関する費用であれば、用途は問いません。  
(注)会合費、人件費、器材費その他一切用途は問いません。ただし、原則として2016年3月末までに所轄庁(都道府県・政令指定都市)に、「認定」の申請を行うことが必要です。

## ■選考基準

選考の際は、主に以下の点を総合的に考慮します。

- ・団体の過去の活動実績
- ・団体としての将来性、地域課題解決への貢献度
- ・認定取得に対する取り組みの進捗
- ・認定後の「認定NPO法人」の活用方法

■助成金額：1団体30万円とします。(総額600万円を予定)

## ②「組織の強化」と「事業活動の強化」助成

## ■助成対象団体：以下を満たす団体

- ・北海道、東京都、中国地区、四国地区、九州地区、沖縄県に所在する団体
- ・特定非営利活動法人・社会福祉法人
- ・社会福祉に関する活動を行う団体を対象とし、原則として2016年3月末までに完了する事業

## ■助成内容

- ・団体の基盤強化に結びつく事業に必要な費用
- ・組織の強化に必要な費用
- ・事業活動の強化のために行う、主に新たな事業、あるいは既存事業の拡充・サービス向上に必要な費用

## ■選考基準

「団体の基盤強化に大きく貢献する・地域課題の解決に大きく貢献する」かを総合的に判断します。

- ・地域や全国の他の団体に波及し、モデルとなるか
- ・地域における他の団体、行政、企業などと連携しているか
- ・先駆的な活動や、新しい概念・スキームを用いているか
- ・地域における福祉人材の育成に大きく貢献するか
- ・地域においてボランティアや寄付者など幅広いサポートを得ようとしているか

■助成金額：1団体50万円を上限とします。(総額900万円を予定)

■応募期限：いずれも、2014年10月31日(金)

■応募先：公益財団法人損保ジャパン記念財団

TEL：03-3349-9570

FAX：03-5322-5257

※ 詳しくは、次のホームページをご参照下さい

<http://www.sj-foundation.org/>

## ●公益財団法人キリン福祉財団●

## 「平成27年度キリン・子育て／

## シルバー「力」(ちから)応援事業」

“地域”“子育て”“ボランティア”をキーワードとして、地域における、子どもに関わる幅広い活動に対して助成します。

## 【キリン・子育て応援事業概要】

## ■助成対象団体

民間団体で4名以上のメンバーが活動する団体・グループであればNPO等の法人格の有無、および活動年数は問いません

## ■助成対象事業

地域における子育てに関わるボランティア活動  
「地域」「子育て」「ボランティア」の3つのキーワードに合致するもの

## ■助成金額

1件あたりの上限額 30万円(総額3,500万円の予定)

■応募期限：2014年11月9日(日)

## 【キリン・シルバー「力」応援事業概要】

## ■助成対象団体

65歳以上のメンバーが中心となって活動する4名以上のグループ(メンバーの半数以上が65歳以上であり、かつ活動の中心となっている)

## ■助成対象事業

高齢者が、地域のために、その知識・技術・経験を活用するグループによるボランティア活動

## ■助成金額

1件あたりの上限額 30万円(総額1,200万円の予定)

■応募期限：2014年10月31日(金)

■応募先：公益財団法人キリン福祉財団

TEL：03-6837-7013

FAX：03-5343-1093

※ 詳しくは、次のホームページをご参照下さい

<http://www.kirinholdings.co.jp/foundation/>

## ●「エクセレントNPO」をめざそう市民会議●

## 第3回エクセレントNPO大賞

望ましい非営利組織像としての「エクセレントNPO」を表彰します。

## ■応募資格

国内外における社会貢献を目的とした市民による国内のNPOやその他の非営利組織(法人格の有無不問)  
※他薦も可

## ■賞の構成

- ・エクセレントNPO大賞〈賞状・賞金50万円〉
- ・市民賞〈賞状・賞金50万円〉
- ・課題解決力賞〈賞状・賞金50万円〉
- ・組織力賞〈賞状・賞金50万円〉

■応募期限：2014年10月17日(金)

■応募先：「エクセレントNPO」をめざそう市民会議

TEL：03-3548-0511

※ 詳しくは、次のホームページをご参照下さい

<https://www.mainichi-ks.co.jp/form/e-npo/>